

## 日本語における理由を表すwh付加詞と補文標識の選択再訪

著者	原 和生
雑誌名	言語教育研究
号	32
ページ	49-70
発行年	2021-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001826/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001826/</a>

# 日本語における理由を表す wh 付加詞と 補文標識の選択再訪

楽原 和生

## 要 旨

「なぜ」「何を」などの理由を表す wh 付加詞には、「発話内の力」の指定には関与しない補文標識を要求するという一見すると奇妙な特徴が共通して観察される。一方、「なぜ」と「何を」にはいくつかの非対称性も見られる。この小論では、「なぜ」と「何を」は、CP 領域の異なる機能範疇によって認可されることを論じる。また、精緻化された節周辺部に関する仮説の観点から、これらの wh 付加詞に見られる共通性と非対称性を説明する可能性を考察する。

## 1. はじめに

(1)のように日本語の wh 疑問文は、文末の「か」「の」のいずれによっても標示されることから、一般に「か」と「の」は疑問を表す補文標識の異形態とされ、(1a)、(1b)は概略(2)に示した同じ構造を持つと仮定される。

- (1) a. お昼に何を食べましたか?
- b. お昼に何を食べたの?
- (2) [CP [IP お昼に何を{食べました/食べた}]]<sub>C</sub> か/の]]

しかしながら、(1a)は動詞を普通体の「食べた」に変えれば間接疑問文に用いることができるが、(1b)のような「の」で終わる疑問文はそのまま間接疑問文に用いることはできず、(3b)のように節末に「か」が生起しなければならない。

- (3) a. お母さんは[僕がお昼に何を食べたか]知りたがっている。  
 b. お母さんは[僕がお昼に何を食べたの \*(か) ]知りたがっている。

(3)の対比は「発話内の力 (illocutionary force)」を指定するのは「か」であり、「の」は疑問化辞ではないこと示している。

(1b)は「の」の後にコピュラの「です」と「か」の現れる(4)に言い換えられることから、(1b)は概略(5)のような構造を持つと考えられる。すなわち、(1b)は補文標識「の」の上部に音形を持たない疑問化辞が占める構造を持つと考えられる。

- (4) お昼に何を食べたのですか?  
 (5) [CP [IP お昼に何を食べた][C の]][(です)][C+Q]]

(1b)が(5)のような構造を持つとすると、「なぜ」は他の wh 句には見られない特徴を備えていることが明らかになる。「なぜ」は、他の wh 句とは異なり「発話内の力」の指定には関与しない「の」を要求する(野田(1995), 栗原(2011a), Kuwabara(2011b, 2013))。

- (6) a. 誰が遅れて来ましたか?  
 b. 誰が遅れて来たの?  
 (7) a. 誰が怒っていますか?  
 b. 誰が怒っているの?  
 (8) a. ??\*なぜ遅れて来ましたか?  
 b. ??\*なぜ田中さんは怒っていますか?  
 (9) a. 君はなぜ遅れて来たの?  
 b. なぜ田中さんは怒っているの?

(1), (6), (7)のように項の wh 句は「か」「の」のいずれで終わる疑問文にも生起できるのに対して、(8), (9)の対比が示すように「なぜ」は「の」と共起しなければならない。

理由を表す wh 付加詞には、「なぜ」以外に「何を」があるが、この wh 付加詞も補文標識の「の」と共起しなければならない<sup>1</sup>。

- (10) a. 何を文句ばかり言ってるの?  
b. 何を変な歌ばかり歌っているの? (Kurafuji (1997: 255))
- (11) a. \*何を文句ばかり言っていますか?  
b. \*何を変な歌ばかり歌っていますか?

wh 付加詞の「なぜ」と「何を」は「の」と共起するという共通した特徴を備えていることから、これらは同一の認可条件に従うと考えるむきもあるが、「なぜ」と「何を」には非対称性も観察される。

この小論では、Rizzi (1997, 2001)の精緻化された CP 構造の観点から、wh 付加詞の「なぜ」と「何を」は、それぞれ異なる機能範疇、IntP, ModP (および SAP) によって認可されることを論じる。また、そのように考えることによって、「なぜ」と「何を」について見られる共通性と非対称性を精緻化された節周辺部に関する仮説の観点から説明する可能性が開けることを論じる。

---

<sup>1</sup> 「なぜ」と類似した意味で用いられる wh 付加詞には「何を」以外にも(i)のような「何が」や「どこが」がある。

(i) a. 何が言語学がそんなに面白いの?  
b. どこがこの大学が民主的だって言うの?  
「何を」と「何が」では共起する述語に違いがあるなどの相違点が観察されるが(山寺(2010))、「何が」「どこが」も節末に「の」を要求する点では、「何を」と同じ特徴を示す。「何を」「何が」「どこが」の異同については、稿を改めて検討したい。

## 2. wh 付加詞「何を」の基本特性

例文(1)のように wh 疑問詞の「何を」は、通常動詞の目的語として機能するが、理由を表す付加詞として用いられることがある (Kurafuji (1996, 1997))。

- (12) a. 何を文句ばかり言ってるの? (=10a)  
b. 何を変な歌ばかり歌っているの? (=10b)  
c. 何を毎晩お酒を飲んでいるの?  
d. 何を袖口にこんなにご飯粒をつけているの?
- (13) a. 子どもたちは何をそんなに慌てているの?  
b. 生徒たちは何をはしゃいでいるの?  
c. 何を初日から遅刻しているの?  
d. 何を酔っ払いが暴れているの?

(12)では「文句ばかり」「歌ばかり」「お酒を」「ご飯粒を」がそれぞれ「言う」「歌う」「飲む」「つける」の目的語であることから、「何を」は「なぜ」同様、付加詞として機能していることが分かる。(13)では目的語をとらない自動詞が用いられているので、この場合の「何を」も付加詞として機能している。

また、(12), (13)の「何を」は、(14), (15)のように「なぜ」に言い換えられることから、「何を」は「なぜ」と類似した意味で用いられているように思われる。

- (14) a. なぜ文句ばかり言ってるの?  
b. なぜ変な歌ばかり歌っているの?  
c. なぜ毎晩お酒を飲んでいるの?  
d. なぜ袖口にこんなにご飯粒をつけているの?
- (15) a. 子どもたちはなぜそんなに慌てているの?

- b. 生徒たちはなぜはしゃいでいるの?
- c. なぜ初日から遅刻しているの?
- d. なぜ酔っ払いが暴れているの?

項の wh 句は、「か」も「の」も伴わない動詞で終わる疑問文に生起することができるが<sup>2</sup>、「なぜ」と「何を」は生起できない。

- (16) a. お昼に何を食べた?
- b. 誰が遅れて来た?
- c. 誰が怒っている?
- (17) a. ??なぜ遅れて来た?
- b. ??なぜ田中さんは怒っている?
- (18) a. ??何を文句ばかり言ってる?
- b. ??何を変な歌ばかり歌っている?
- c. ??子どもたちは何をそんなに慌てている?
- d. ??生徒たちは何をはしゃいでいる?

このように、(i) wh 付加詞の「何を」は「なぜ」に置き換えられること、(ii) 項の wh 句とは異なり、共通して「の」と共起しなければならないという特徴を持つことから、「なぜ」と「何を」は同一の認可条件に従うと考えるむきもあるが、以下で

<sup>2</sup> (16)のような動詞で終わる疑問文は、文末上昇調で発話される。例文末尾の“?”は文末上昇調のイントネーションを示す。(16)は文末下降調(=!)で発話することもできるが、その場合、wh 句の値を求める疑問詞疑問文ではなく、修辞疑問文として解釈される。(17)の例も文末下降調で発話されれば、修辞疑問文として解釈することができる。一方、(18)を文末下降調で発話するのは不自然で、「の」あるいは「んだ」が文末に生起しなければならない。

- (i) a. 何を文句ばかり言ってる{の/んだ}!
- b. 何を变な歌ばかり歌っている{の/んだ}!
- c. 子どもたちは何をそんなに慌てている{の/んだ}!
- d. 生徒たちは何をはしゃいでいる{の/んだ}!

詳述するように「何を」には「なぜ」とは異なる特徴が観察される。

まず、(12), (13)と(14), (15)には解釈上の違いが見られる。「なぜ」を持つ(14), (15)の例は理由を尋ねる疑問詞疑問文であるのに対して、「何を」を持つ(12), (13)は、反語的に用いられており、話し手の「非難」や「疑念」などの意味を表している(天野(2008), Konno(2004), 高見(2010))。例えば、(12a)は文句ばかり言うべきではないという話し手の聞き手に対する非難を表している。(13a)は慌てる状況ではないのに、子どもたちが慌てている様子を見て不思議に思っている話し手の「疑念」を表している。つまり、(1)の項の「何を」とは異なり(12), (13)の「何を」は話し手の「非難」や「疑念」を表す付加詞として機能しており、wh句の値を求めているのではないことが分かる<sup>3</sup>。

(12a)のような例に対して、聞き手は(19B)のように理由を提示して応答することもできる。

(19) A: 何を文句ばかり言ってるの?

B: 相談しないでなんでも勝手に決めちゃうからだよ。

しかしながら、(12)の例はそれぞれ(20)のような文を続けて言うことができることから、聞き手に理由の提示を求めているのではないことが分かる。

(20) a. いいかげんにしろよ。

b. うるさくて仕事にならないじゃないか。

c. 医者にお酒は控えるように言われているんじゃないの。

---

<sup>3</sup> (12), (13)は、文末下降調で発話される場合、「非難」の意味が強く感じられる。一方、「なぜ」を含む(14), (15)を反語的に用いるには、文末下降調に発話しなければならない。(14), (15)のように文末上昇調で発話される場合、「なぜ」疑問文は話し手の非難を表すことができないように思われる。稲田・今西(2016)も同様の観察をしている。

d. もう6年生でしょ。

このような「なぜ」と(付加詞の)「何を」の違いは、次の対比によっても確認することができる。Konno (2004)が指摘するように、(12)のような例は、疑問文を要求する発話伝達動詞の被伝達節として用いることはできない。

- (21) a. \*井上先生は「何を文句ばかり言ってるの?」とその学生に尋ねた。  
b. \*田中さんは「何を変な歌ばかり歌っているの?」と僕に聞いた。  
c. \*看護師さんが「何を毎晩お酒を飲んでいるの?」と患者に尋ねた。  
d. \*お母さんが「何を袖口にこんなにご飯粒をつけているの?」と長男に聞いた。

これに対して、発話伝達動詞が「言う」であれば、(12)を被伝達節にとることができる。

- (22) a. 井上先生は「何を文句ばかり言ってるの?」とその学生に言った。  
b. 田中さんは「何を変な歌ばかり歌っているの?」と僕に言った。  
c. 看護師さんが「何を毎晩お酒を飲んでいるの?」と患者に言った。  
d. お母さんが「何を袖口にこんなにご飯粒をつけているの?」と長男に言った。

(21)と(22)の対比は、「何を」を持つ(12)のような例は典型的な疑問詞疑問文ではないことを示している<sup>4</sup>。

---

<sup>4</sup> (13)のような「何を」が自動詞と共起する例については、(21)と(22)の対比と比べるとはっきりしないところがあるように思われる。

- (i) a. ??井上先生は「何を慌てているの?」と子どもたちに聞いた。  
b. ??田中先生は「何をはしゃいでいるの?」と生徒たちに尋ねた。  
c. ??山田課長は「何を初日から遅刻しているの?」と私に聞いた。  
d. ??田中さんは「何を酔っ払いが暴れているの?」と警察官に尋ねた。  
(ii)は(21)よりも容認性がやや高いように思われる。発話伝達動詞に「言う」を用いた(ii)は問題なく許



以下では、「何を」を持つ(12), (13)のような例文を「なぜ」疑問文と区別し「wh 付加詞構文」と呼ぶことにする。

「なぜ」と「何を」の相違点として、分裂文に関する特徴を挙げるができる。(23), (24)に示したように「なぜ」やその他の wh 句は分裂文の焦点位置を占めることができる。これは wh 疑問詞が疑問の焦点であるからに他ならない。

- (23) a. お昼に食べたのは何をですか?  
b. パーティーに来たのは誰ですか?  
c. その本を貸したのは誰にですか?  
d. 山田先生に会ったのはどこですか?
- (24) a. 遅れて来たのはなぜですか?  
b. 田中さんが怒っているのはなぜですか?

他方、wh 付加詞構文の「何を」は、分裂文の焦点位置に現れて疑問の焦点になることはできない。

- (25) a. \*文句ばかり言ってるのは何をですか?  
b. \*変な歌ばかり歌っているのは何をですか?  
c. \*毎晩お酒を飲んでいるのは何をですか?

---

容される。

- (ii) a. 井上先生は「何を慌てているの?」と子どもたちに言った。  
b. 田中先生は「何をはしゃいでいるの?」と生徒たちに言った。  
c. 山田課長は「何を初日から遅刻しているの?」と私に言った。  
d. 田中さんは「何を酔っ払いが暴れているの?」と警察官に言った。
- (i)は被伝達節が文末下降調に発話される場合には、容認不可能な文となる。
- (iii) a. \*井上先生は「何を慌てているの!」と子どもたちに聞いた。  
b. \*田中先生は「何をはしゃいでいるの!」と生徒たちに尋ねた。  
c. \*山田課長は「何を初日から遅刻しているの!」と私に聞いた。  
d. \*田中さんは「何を酔っ払いが暴れているの!」と警察官に尋ねた。
- 「何を」が自動詞と共起する(i)と(21)の違いについては、稿を改めて検討したい。

- d. \*袖口にこんなにご飯粒をつけているのは何をですか?
- (26) a. \*子どもたちがそんなに慌てているのは何をですか?
- b. \*生徒たちがはしゃいでいるのは何をですか?
- c. \*初日から遅刻しているのは何をですか?
- d. \*酔っ払いが暴れているのは何をですか?

この対比は、wh 付加詞構文の「何を」が疑問の焦点になれないことを示している。

以上、「なぜ」疑問文と wh 付加詞構文は、表面上類似しているものの、後者は反語的に用いられており、「非難」や「疑念」といった「発話行為 (speech act)」を表す構文であることを見た (Konno (2004), Nakao and Obata (2009))。このように「なぜ」疑問文と wh 付加詞構文が異なる発話行為を表すとすると、この2つの節末にはなぜ「の」が生起しなければならないのだろうか。次節ではこの問題について、Rizzi (1997, 2001)の精緻化された節周辺部の構造の観点から検討する。

### 3. 「なぜ」「何を」と「の」の共起関係

第1節で述べたように、疑問文の節末に現れる「の」は定形動詞の上部に位置し、さらにその上部にはコピュラと疑問化辞の「か」（あるいは、音形を持たない疑問化辞）が位置すると考えられるので、通常仮定されている(2)のような構造よりも精緻な CP 構造を仮定する必要がある。以下では Rizzi (1997, 2001)の精緻化された CP 構造による栗原 (2011a), Kuwabara (2011b, 2013)の「なぜ」疑問文の分析を概観する。Rizzi はイタリア語の左節周辺部に現れる要素の相対的順序に関する事実に基づいて、通常 CP として表示される領域は次の構造を持つとしている<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> (27)の Top の\*は、それが繰り返し現れうることを表す。詳しくは Rizzi (1997, 2001) を参照されたい。

(27) [<sub>ForceP</sub> Force [<sub>TopP</sub> Top\* [<sub>IntP</sub> Int [<sub>TopP</sub> Top\* [<sub>FocP</sub> Foc [<sub>TopP</sub> Top\* [<sub>FinP</sub> Fin [<sub>IP</sub>...]]]]]]]]]]]

(27)の構造では、従来の CP 構造では区別されていない 2 つの補文標識 Force と Fin(itness) が設定されている。Force には「発話内の力 (文タイプ)」を指定する補文標識が現れ、他方 Fin には文の定形・非定形に関する素性が指定される。Force と Fin の間に、話題、‘why’、焦点を認可する機能範疇が現れる。

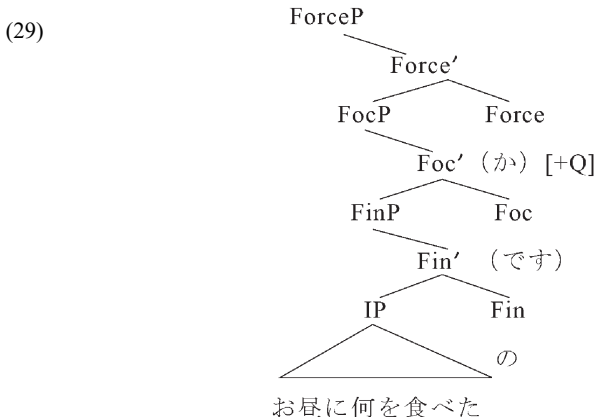
Rizzi (2001: 290) は、イタリア語の *perché* ‘why’ と焦点要素の相対的順序に関する事実に基づいて、*perché* は、他の *wh* 句とは異なり、Int(errogative) によって認可されるとしている。(28) が示すように、*perché* は焦点要素と共起することができるが、その場合、*perché* は焦点要素の左側に現れることから、*perché* は FocP よりも上位に位置する Int によって認可されると仮定される<sup>6</sup>。

- (28) a. *Perché QUESTO avremmo dovuto dirgli, non qualcos’altro?*  
Why THIS had should say.him not something else  
‘Why THIS we should have said to him, not something else?’
- b. *\*QUESTO perché avremmo dovuto dirgli, non qualcos’altro?*  
this why had should say.him not something else  
‘THIS why we should have said to him, not something else?’

日本語の *wh* 疑問文には 2 種類の補文標識「の」「か」が現れるが、精緻化された CP 構造に従えば、それぞれ Fin, Force を占めると考えられる (乗原 (2011a), Kuwabara (2011b, 2013))。

---

<sup>6</sup> Rizzi (2001: 290) は、*perché* 以外の *wh* 句は焦点要素と共起できないので、Foc によって認可されると仮定する。



通例、項の wh 句は「の」を要求しないことから、Force によって認可されると考えられる (栗原 (2011a), Kuwabara (2011b, 2013))。一方、すでに述べたように「なぜ」は「の」を伴わずに「か」で終わる疑問文には生起できないことから、「なぜ」もイタリア語の *perché* 同様、Int によって認可されると仮定することによって、「なぜ」と「の」の共起関係を説明することができる (栗原 (2011a), Kuwabara (2011b, 2013))。

(27)は、Force と Fin がそれぞれ別個の補文標識として具現化した場合の構造を示したものであるが、Rizzi (1997)によれば、このように Force と Fin が分離して現れるのは、CP 領域に随意的な機能範疇が現れる場合である。英語の補文標識の *that* を例にとると、話題、焦点などの要素が現れなければ、(30)に示したように Force と Fin は 1 つの補文標識に融合した融合的補文標識を持つ CP 構造に具現化する。

(30) I think [<sub>ForceP</sub> [<sub>Force</sub> that/0][<sub>IP</sub> John will win the prize next year]]  
+decl, +fin

他方、例えば、話題要素が現れ TopP が活性化されていれば、(31)のように Force と



(32), (33)のような wh 付加詞構文では、「の(ん)」の後に「だ」が生起することができる<sup>7</sup>。

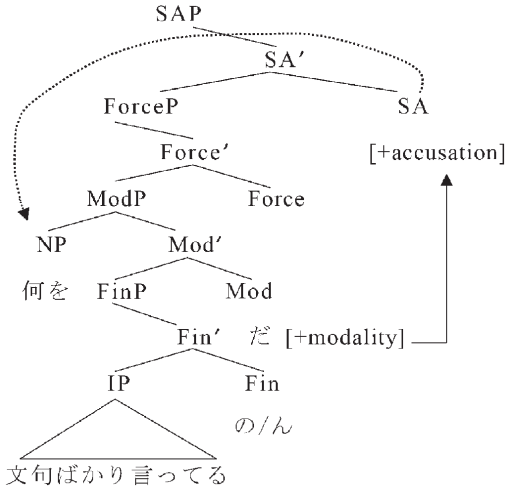
- (32) a. 何を文句ばかり言ってるんだ?  
b. 何を変な歌ばかり歌っているんだ?  
c. 何を毎晩お酒を飲んでいるんだ?  
d. 何を袖口にこんなにご飯粒をつけているんだ?
- (33) a. 子どもたちは何をそんなに慌てているんだ?  
b. 生徒たちは何をはしゃいでいるんだ?  
c. 何を初日から遅刻しているんだ?  
d. 何を酔っ払いが暴れているんだ?

(32), (33)の「だ」は一般に断定の助動詞と呼ばれることから、命題内容に対する話し手の心的態度を表す要素と考えられるので、「の」の上部に現れる「だ」は、ModP (Modal Phrase) の具現形と仮定することにしよう。また、第2節で述べたように wh 付加詞構文は、「非難」「疑念」といった発話行為を表していることから、主節の最上部には、発話行為に関わる素性を持つ Speech Act Phrase (SAP) があると仮定する((Speas and Tenny (2003))). ModP の主要部に現れる「だ」は話し手に関わる [+modality]素性を持つと考えられるが、これが SAP 主要部へ移動し、wh 付加詞の「何を」は、SA に c-command されることによって、「話者指向」の要素として認可されると仮定する。

---

<sup>7</sup> 「の」の後に「だろう」が現れることもできる。この場合は、文末は非上昇調のイントネーションとなる。

(34) (= (10a))



wh 付加詞の「何を」は、文頭位置に現れるのが最も自然であることから ((Konno (2004), 高見 (2010))、ModP の指定部に基底生成 (externally merge) されると仮定する。

(34)に示したように、wh 付加詞構文の「何を」の認可には、ModP とその上部の SAP が関与していると仮定すると、「なぜ」と「何を」に見られる共通性を説明することができる。「なぜ」と「何を」は、第 2 節で述べたように異なる特徴を持つものの、共通して「の」と共起しなければならない。これは「なぜ」と「何を」の認可には、CP 領域の随意的な機能範疇、すなわち、IntP と ModP が関与しているからである。「なぜ」疑問文と wh 付加詞構文では分析的補文標識が選択されるため、Fin の具現形である「の」が現れるのである。

以下、(34)に示した分析によって、第 2 節で見た wh 付加詞構文の特徴がどのように説明されるのか見ていくことにしよう。第 2 節で述べたように、wh 付加詞構文は、「聞く」「尋ねる」の被伝達節として用いることはできない。

- (35) a. \*井上先生は「何を文句ばかり言ってるの?」とその学生に尋ねた。  
 b. \*田中さんは「何を変な歌ばかり歌っているの?」と僕に聞いた。  
 c. \*看護師さんが「何を毎晩お酒を飲んでいるの?」と患者に尋ねた。  
 d. \*お母さんが「何を袖口にこんなにご飯粒をつけているの?」と長男に聞いた。

(35)が許容されないのは、発話伝達動詞の「聞く」「尋ねる」が被伝達節に [+question] という素性を持つ SAP を要求するからである。

一方、「言う」という発話伝達動詞は、「依頼」「約束」「命令」など異なる発話行為を表す被伝達節と共起しうることから、被伝達節に特定の発話行為を要求しないことが分かる。

- (36) 山田さんは「3時に来てください。」と言った。  
 (37) 山田さんは「明日お借りしていた本を返します。」と言った。  
 (38) お父さんは「もっと早く歩け。」と僕に言った。

このように発話伝達動詞の「言う」は、特定の発話行為に関する素性を持つ SAP を要求しないので、「非難」や「疑念」といった発話行為を表す wh 付加詞構文は「言う」の被伝達節になることができると考えられる。

- (39) a. 井上先生は「何を文句ばかり言ってるの?」と言った。  
 b. 田中さんは「何を変な歌ばかり歌っているの?」と僕に言った。  
 c. 看護師さんが「何を毎晩お酒を飲んでいるの?」と言った。  
 d. お母さんが「何を袖口にこんなにご飯粒をつけているの?」と言った。

(36)-(38)の発話伝達動詞「言う」の後に別の動詞を続けて言う場合、その動詞は被



伝達節の発話行為を表していなければならない。

- (40) a. 山田さんは「3時に来てください。」と言って田中さんに依頼した。  
b. \*山田さんは「3時に来てください。」と言って田中さんに聞いた。
- (41) a. 山田さんは「明日お借りしていた本を返します。」と言って私に約束した。  
b. \*山田さんは「明日お借りしていた本を返します。」と言って私を非難した。
- (42) a. お父さんは「もっと早く歩け。」と言って僕に命令した。  
b. \*お父さんは「もっと早く歩け。」と言って僕に約束した。

wh 付加詞構文が被伝達節の場合、「言う」の後には「責める」「咎める」「非難する」「叱る」などの動詞が用いられる。

- (43) a. 井上先生は「何を文句ばかり言ってるの?」と言ってその学生を責めた。  
b. 田中さんは「何を変な歌ばかり歌っているの?」と言って僕を咎めた。  
c. 看護師さんが「何を毎晩お酒を飲んでいるの?」と言って患者を非難した。  
d. お母さんが「何を袖口にこんなにご飯粒をつけているの?」と言って長男を叱った。

(43)が容認されるのは、伝達節の「責めた」「咎めた」「非難した」「叱った」が被伝達節の表す発話行為と一致するからである。

第2節で見たように wh 付加詞構文の「何を」は、「なぜ」とは異なり疑問の焦点になることはできない。上で示した分析では、「何を」は、話し手の心的態度を表す「だ」（あるいは、音形を持たない「だ」）が SA に移動し、SA によって c-command されることによって、「何を」は話者指向の要素として解釈されるとした。

- (44) a. \*文句ばかり言ってるのは何をですか?  
 b. \*変な歌ばかり歌っているのは何をですか?  
 c. \*毎晩お酒を飲んでいるのは何をですか?  
 d. \*こんなにご飯粒をこぼしているのは何をですか?
- (45) a. \*子どもたちがそんなに慌てているのは何をですか?  
 b. \*生徒たちがはしゃいでいるのは何をですか?  
 c. \*初日から遅刻するのは何をですか?  
 d. \*酔っ払いが暴れているのは何をですか?

「何を」が疑問の焦点となれないのは、「何を」が話者指向の要素だからである。

(44), (45)の非文法性は、(46), (47)のように話者指向の副詞 (speaker-oriented adverb) が疑問文中に生起できないのと同じ理由によると考えられる。

(46) \*Has John surprisingly arrived? (Bellert (1977: 343))

(47) \*{Has/Will} John {probably/certainly/evidently} come? (*ibid.*: 344)

話者指向の副詞は、命題内容に対する話し手の確信度や評価を表すが、疑問文は真理値を持たないため、(46), (47)のように話者指向の副詞は疑問文には生起できない。

また、「何を」はそもそも分裂文の焦点位置を占めることができない。

- (48) a. \*文句ばかり言ってるのは何をだ。  
 b. \*変な歌ばかり歌っているのは何をだ。  
 c. \*毎晩お酒を飲んでいるのは何をだ。  
 d. \*こんなにご飯粒をこぼしているのは何をだ。
- (49) a. \*子どもたちがそんなに慌てているのは何をだ。

- b. \*生徒たちがはしゃいでいるのは何をだ。
- c. \*初日から遅刻するのは何をだ。
- d. \*酔っ払いが暴れているのは何をだ。

分裂文の焦点になることができるのは、命題の一部をなす要素で、命題の外にある話し手の心的態度を表す要素は、焦点位置には生起できない。(50)のように VP を修飾する副詞は分裂文の焦点位置に生起できるが、法性や発話行為に関わる発話様式を表す副詞は分裂文の焦点位置を占めることはできない。

- (50) a. It was very carefully that John did it. (天野(1976: 68))
- b. It was recently that he had an accident. (*ibid.*: 69.)
- (51) a. \*It is certainly that John is a hard worker.
- b. \*It is probably that Mary is happy.
- c. \*It is frankly that I'm tired.

上で述べたように、wh 付加詞構文の「何を」は発話行為に関わる話者指向の付加詞のため、分裂文の焦点位置を占めることができないのである。

wh 付加詞構文の「何を」は疑問の焦点になれないことからすると、「何を」は wh 疑問詞とは共起できたと予測される。次の例文は、この予測が正しいことを示している。

- (52) a. ??誰が何を文句ばかり言ってるの?
- b. ??誰が何を変な歌ばかり歌っているの?
- (53) a. ??誰が何をそんなに慌てているの?
- b. ??誰が何を初日から遅刻しているの?

wh 付加詞構文の「何を」は、話者指向の要素であるため、[+Q]素性を持たないと考えられる。そのため wh 疑問詞と共起して多重 wh 疑問文を形成することはできないのであろう。一方、「なぜ」が多重 wh 疑問文に生起できるのは、言を俟たない。

- (54) a. 誰がなぜ遅れてきたの?  
b. 何をなぜ買ったの?

最後に wh 句との共起可能性に関連する残された問題について触れておきたい。wh 付加詞構文は、反語的に用いられており、修辞疑問文の一種と言えなくもない。しかしながら、(52), (53)の例は修辞疑問文としても許容されないように思われる。例えば、(52a), (53a)をそれぞれ「誰も文句を言う理由はない。」「誰もそんなに慌てる理由はない。」と解釈することはできない。

一方、wh 疑問詞文は修辞疑問文に解釈することができる。

- (55) 誰がこんなもの買うの?  
(誰もこんなものは買わない。)  
(56) a. 誰が何を食べたって言うの?  
(誰も何も食べなかった。)

- b. 誰が何をパーティーに持って来たと言うの? (Sprouse (2007: 573))  
(誰も何もパーティーに持って来なかった。)

wh 付加詞構文は、反語的に用いられ、「非難」や「疑念」という発話行為を表しているという点では、(55), (56)のような修辞疑問文に類似しているように思われるが、wh 付加詞構文の「何を」は wh 疑問詞と共起することができないので、(56)のよ

うな多重 wh 修辭疑問文の解釈を持つことはできない<sup>8</sup>。これらの問題については、稿を改めて論じたい。

## 5. おわりに

この小論では、「なぜ」と wh 付加詞構文の「何を」の共通性と非対称性について考察した。「なぜ」と wh 付加詞構文の「何を」は、それぞれ IntP, ModP (および SAP) によって認可されると仮定することで、「なぜ」「何を」と「の」の共起関係が精緻化された CP 構造に関する仮説によって説明されることを論じた。「なぜ」と「何を」の認可には、異なる機能範疇が関与しているが、これらは Force と Fin の間に現れる随意的な機能範疇であるため、分析的補文標識 Fin の具現形である「の」が現れるのである。また、wh 付加詞構文は、典型的な wh 疑問文とは異なる [+accusation] という発話行為に関する素性を持つことを論じた。

## 参考文献

- 天野政千代 (1976) 「分裂文の焦点の位置における副詞」『英語学』14, 66-80.
- 天野みどり (2008) 「拡張他動詞文—「何を文句を言ってるの」—」『日本語文法』8.1, 3-19.
- Bellert, Irena (1977) “On Semantic and Distributional Properties of Sentential Adverbs,” *Linguistic Inquiry* 8, 337-351.
- 稲田俊明・今西典子 (2016) 「日英語の修辭疑問文をめぐって一言語の普遍性と多様性の探索(1)―」『長崎大学言語教育研究センター論集』第4号, 1-23.
- Konno, Hiroaki (2004) “The *Nani-o X-o* Construction,” *Tsukuba English Studies* 23, 1-25.

---

<sup>8</sup> 「なぜ」を含む(54)のような多重 wh 疑問文も、修辭疑問文の解釈を持たないと思われる。この点で「なぜ」は wh 付加詞構文の「何を」と同じ振る舞いを示す。

- Kurafuji, Takeo (1996) “Unambiguous Checking,” *MIT Working Papers in Linguistics* 29, 81-96.
- Kurafuji, Takeo (1997) “Case-Checking of Accusative *Wh*-Adjuncts,” *MIT Working Papers in Linguistics* 31, 253-271.
- 栗原和生 (2011a) 「補文標識と *Wh* 句の共起関係について—理由を表す *Wh* 付加詞を中心に—」『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平』長谷川信子 (編), 151-176, 開拓社, 東京.
- Kuwabara, Kazuki (2011b) “Reason *Wh*-Adjuncts and Their Interaction with Complementizers,” 『言語科学研究 特別号 談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して』遠藤喜雄 (編), 251-283, 神田外語大学大学院言語科学研究科.
- Kuwabara, Kazuki (2013) “Peripheral Effects in Japanese Questions and the Fine Structure of CP,” *Lingua* 126, 92-119.
- Nakao, Chizuru and Miki Obata (2009) “When ‘What’ Means ‘Why’: On Accusative *Wh*-Adjuncts in Japanese,” *U. Penn Working Papers in Linguistics* 15.1, 152-161.
- 野田春美 (1995) 「～ノカ?, ～ノ?, ～カ?, ø?’」『日本語類義語表現の文法 (上) : 単文編』, 宮島達夫・仁田義雄 (編), 210-219, くろしお出版, 東京.
- Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (2001) “On the Position of “Int(errogative)” in the Left Periphery of the Clause,” *Current Studies in Italian Syntax: Essays Offered to Lorenzo Renzi*, ed. by Guglielmo Cinque and Giampaolo Salvi, 287-296, Elsevier, London.
- Speas, Peggy and Carol Tenny (2003) “Configurational Properties of Point of View Roles,” *Asymmetry in Grammar*, ed. by Anna Maria Di Sciullo, 315-344, John Benjamins, Amsterdam.

Sprouse, Jon (2007) "Rhetorical Questions and WH-Movement," *Linguistic Inquiry* 38, 572-580.

高見健一 (2010) 「「何を文句を言ってるの」構文の適格性条件」『日本語文法』10.1, 3-19.

山寺由起 (2010) 「Wh 付加詞構文—「何がこの本が面白いの」—」『日本語文法』10.2, 160-176.